



INNOVATION GARDEN

2020.10.09^{FRI}—10^{SAT}

第1回 Innovation Garden イベントレポート

日本流のイノベーションを世界に向けて発信するグローバルビジネスカンファレンス「Innovation Garden」が10月9、10両日、東京・晴海のCLT PARK HARUMIを拠点にオンラインで開催された。コンセプトは、オンラインの拡張性とオフラインの臨場感を融合させた新しい価値体験である「Overline」。「Ars Electronica」など世界最先端のクリエイティブ機関をパートナーに招き、多彩なビジネスリーダーらによる討論の様相をオンラインで世界同時配信した。イベント後も参加者を中心にイノベーション創発のコミュニティとして活動が続ける予定。

国内外から著名なイノベーター約80人が2日間にわたって共演した「Innovation Garden」。その熱気を帯びたセッションやワークショップは、ポストコロナ時代の New Normal を提案する場として、各界からの注目を集めた。

「Innovation Garden」は、三菱地所、読売新聞社、博報堂の3社による実行委員会が企画・主催。このカンファレンスを日本流のイノベーションの発信拠点として育て、コロナウイルスの感染拡大によって大変革がもたらされた年に日本から経済やライフスタイルの未来を示し、次世代を担うビジネスを生み出すことを目的にしている。

登壇者が視聴者に向けて一方的に話しかける従来のカンファレンスと異なり、視聴者がネットを通じて賛同の意志をハートマークなどで可視化するシステムなども組み込まれ、リアルな現場で講演を聴くよりも双方向の意思疎通を図りやすいよう工夫された。

この機能を使って講師が視聴者に向けて質問を投げかけて画面上に浮かび上がるハートの数で反応を確認したり、逆に受講者から寄せられた質問に目を通したりしながら話を進める場面が数多く見られた。

経済産業省の須賀千鶴さんは、基調講演のなかで、このインタラクティブ性とマッチング機能に着目したと話し、これがイノベーションのきっかけになると視聴者に呼びかけた。



さらに、「GOEN MATCHING」と名付けられ、お互いの肩書にとらわれずカンファレンスという場での共感に基づいたパーソナルマッチングの手法も導入。企業とスタートアップが出会い、新事業の創出につながりやすい環境が整えられた。デジタルの持つポテンシャルを最大限に応用して、物理的に離れている参加者がより親密な関係を築きやすい仕組みが随所に盛り込まれているのも、今回のカンファレンスの特長だ。



発信の拠点として選んだ場所もユニークだ。三菱地所が事業主となり、文化情報の発信する目的で19年末から1年間の予定で東京・晴海に設けられた CLT PARK HARUMI。

「CLT」とは「Cross Laminated Timber (直交集成板)」の頭文字で、木の板の繊維方向が直角に交わるように接着した大判の木材パネルのこと。オーストリアを中心に1990年代から発展してきた新しい建材で、日本でも2010年代以降、様々な場面で用いられるようになっている。従来の木材パネルより、強度が安定し、耐火性などにも優れるため、ヨーロッパなどでは大型建築の構造にも使われ、その用途が世界的に注目されている。

三菱地所もその可能性に注目し、17年から CLT を活用した開発プロジェクトをとして研究開発を開始。その一環として設立されたのが「CLT HARUMI PARK」だ。

文化交流施設として企画され、設計監理を三菱地所設計が行い、デザイン監修を国立競技場の設計などを手がけ、世界的に活躍する建築家の隈研吾さんが担当。CLTの木材が積み重ねられたユニークな

内外装が目をはき、ぬくもりのある表情がカンファレンス全体の雰囲気象徴しているようにも感じられた。

実はこの施設、今回のカンファレンス終了後に解体され、CLTが提供された岡山県恵庭市の国立公園蒜山に移築される。CLTならではのサステナブルな特徴を活用することで、都市と地方との資源・文化の循環も目指しているという。

隈さんはカンファレンスにも登壇。三菱地所の設計担当者らと日本における都市開発のこれからについて話し合い、「日本の強みは何と言っても地方の多様性。このCLTの建物のように地方と都市の連携がスムーズに進められれば、日本の街づくりが世界の指標になり得る」と指摘していた。



もちろん、各セッションの内容も充実。2日間で30を超すセッションと20近いワークショップが行われた。「Ars Electronica」(オーストリア・リンツ)、「Border Sessions」(オランダ・ハーグ)、「C2」(カナダ・モントリオール)といった世界最先端のクリエイティブ・カンファレンスが参加し、

それぞれの活動と今後のビジネスの行方などについて報告。オンラインならではの「Innovation Garden」が国境をやすやすと越え、世界規模で注目を集めることになった。



Ars Electronica



BORDER SESSIONS



C2

視聴者の関心の広さに応じて、登壇者も多種多様だった。例えば、2日目のセッションに登壇したロンドンブーツ1号2号の田村淳さん。田村さんはポストコロナのビジネスイノベーションの可能性について、ユーモアを交えながら話し視聴者を引きつけた。また、国際政治学者の三浦瑠麗さんは今後の日本の国際戦略について解説。さらにデジタル技術を駆使した新型コロナ対策で世界の注目を集めた

台湾のデジタル担当大臣、オードリー・タンさんもオンラインで参加。これからのデジタル・リテラシーの重要性について、自らの体験に触れながら報告した。



こうしたセッション以外にも、経済産業省が推進するスタートアップ育成支援プログラム「J-Startup」で選ばれた企業による活動報告も、YouTube ライブにて行われた。

ビジネスの最前線で活躍する企業の経営者と社会を広く俯瞰する研究者の対談も目を引いた。「超高齢化社会の幸福とデジタル」をテーマに、サントリーウエルネス社長の沖中直人さんと、データサイエンスや医療政策が専門の慶応大学医学部教授、宮田裕章さんによる対談もそうした注目のセッションだ。

サントリーウエルネスは「Innovation Garden」のゴールドパートナーでもあり、日本のエイジング社会の課題解決に積極的に取り組むリーディングカンパニーとしても知られる。浜中さんは対談の中でシニアのデジタルデバイドをどのように解消していくかについて、自らの経験を通して講演。それを受ける形で、宮田さんが医療の現場で活用されているデータサイエンスの可能性について話した。同社はウエルネスの知見を活用したワークショップも開催。「カンファレンスへの参加を通してデジタルの最先端の現場に触れられ、企業として大変有益な機会となった。社会が大きな変革期を迎えている今、カンファレンスを通して出会った様々な分野の人たちとの協業を積極的に進めていきたい」と沖中さんは話していた。



新型コロナ対策が万全に施された会場には最新のデジタル機器が持ち込まれ、マスク姿の現場スタッフらも同時進行する複数のプログラムに合わせて、的確に動き回った。

今回のカンファレンスには、進行役から配信技術者など、延べ75人ほどのスタッフが関わった。何もかもが新しい試みだっただけに、スタッフの集中力は高く、視聴者からの肯定的な反応がモニター越しに伝わるたびに、オンラインとはひと味違う「リアルな」熱気に包まれていった。そうしたスタッフ一人一人の熱意が、今回のカンファレンスを支えたと言っていいだろう。

充実した今回のカンファレンスは国内外で大きな反響があり、カンファレンス開催中に第2回の開催が決定。21年2月26日、東京・大手町 / 丸の内 / 有楽町エリアを発信拠点に実施される予定で、詳細は今後「Innovation Garden」の公式サイト (<https://innovation-garden.com/>) で告知する。

注目されたセッションから



東京大学 大学院工学系研究科 教授 **松尾豊**

Telexistance inc. Co-founder & CTO **佐野元紀**

「AI と人間の共進化」

生命と、AI やロボットの違いを明確化しつつ、
両者の協業と、テレエグジスタンス（遠隔存在感）
をはじめとする将来の共生世界を想像



サツドラホールディングス株式会社 代表取締役社長兼 CEO **富山浩樹**

Sansan 株式会社 Sansan 事業部 Sansan Plus 推進部 副部長 **久永 航**

Digital Platformer 共同創業者兼取締役 **松田一敬**

「ポストコロナの DX」

DX と言っているが、何を DX するのか、
そもそも DX できるもの、できないものは何か。
DX が世の中に何をもたらすのか、について深い議論



京都大学前総長 **山極 壽一**

大阪大学基礎工学研究科教授・ATR 石黒浩特別研究所客員所長 **石黒浩**

「機械化する人間と、人間化する機械」

人間の、動物の、意識と身体の関係とは？ AI やロボットは
工業的に均一化を目指すのに、なぜ自然は多様性を許容するのか？
人間と機械の「鶏と卵」な関係を掘り下げる